

山桜の里 戸赤

冬の風物詩
凍み大根づくり

あけましておめでとございます。



年末からはしまっている凍み大根づくり。ゆでてから冷水に一晩さらし年につるす。凍みたり溶けたりしながら寒風のなかで乾燥が進んでいく。



森島さんが載っている三重県緑化協会のネット情報

公益社団法人 三重県緑化推進協会

森の名手・名人

■森の名手・名人認定事業

平成26年度の「森の名手・名人」の認定証授与式(もりのくに・にっぽん運動事務局)理事長佐々木毅様には四日市農林事務所長、廣田利夫様には大津市農林事務所長から10月29日に伝達授与されまことについて談話をいただき、深く感銘しました。



森島辨三様

森島さん 森の名手・名人

戸赤の木地挽き再生事業の指導者森島さんが「森の名手名人」に選ばれました。公益法人国土緑化推進機構が森にかかわる優れた技を極め、他の模範となつていく達人を選んでいるもので、二十六年度は全国で六十四人でした。森島さんが紹介されている内容は次の通りです。

四十年来、木地師としてろくろ加工品の制作を継続している。盆や椀などを主に制作種類は多岐にわたる。仕上げに全粉や銀粉を使った漆塗りに特徴がある。また、木工旋盤自体も自ら開発制作し販売も行っている。七年前には福島県会津地方から依頼があり、水車ろくろも制作している。現在は、指導者としても数多くの生徒の指導を行い、これまでの累計生徒数は数千人に及び後進の指導に当たっている。

「森の名手名人」には「聞き書き甲子園」に参加している高校生たちからの「聞き書き取材」等に協力することや、全国各地で開催する緑化関係イベント等にも参加し、その優れた知恵や技を披露することが求められます。

【木地の学習No.51】 通常の山神は女神であるところが多いが、木地師の祀る山神は夫婦像が多い。とりわけ会津木地師の山神は、ほとんどが惟高親王と称する夫婦像である。相原一族の本家筋は磯八家であるといわれ、鈴倉山神の地も相原磯八氏の所有になっている。祭日は旧二月十二日であるが、最近では仕事の都合上日曜日に変更した。祭日の前に頭屋の子どもが鈴倉から御神体一対を「スカリ」に入れて背負ってくる。祭りが終わると再び鈴倉の木祠の中へ納めてくる。頭屋は一年毎の輪番制となっている。御神体は烏帽子直衣姿(24.5センチ)と小袖袴姿(二一センチ)をしており、以前は彩色されていたらしく、女神の方には胡粉を塗ったと思われる白い塗料がわずかに残っている。男神は烏帽子部分が破損したため後に補修している。共に底面に七月廿九日の墨書銘がある。御蔵入では、明治維新前後まで山を渡り歩いて仕事をしてきた木地師達が大半であるが、下郷町戸赤小屋と田島栗生沢の相原氏は、早くから定着し、農民へと移行していった木地師の集団であった。栗生沢の定着年代はいつごろになるだろうか。集落には、それに答える伝承は残されていない。鈴倉山神の木祠の中には、山神勧請と建替の棟札が納められている。それによると山神勧請が、元文三(1738)年とあり、願主名は、肉眼では判読できないが、赤外線映像による判定では、五人ほどの名前と思われる墨書銘が確認できる。「(会津地方歴史民俗資料館「木地語り」より) (つづく)」

赤土の歳の神

1月14日午後7時から、ほぼ全員集合で9人

厄落としの
ミカンまき



芯となる御神木は準備の日に切り出す

大内の「雪まつり」は2月14、15日、「日本夜景遺産」に認定されている中山の「雪・月・火」は2月21日。

大内も中山も湯野上温泉駅から無料のシャトルバスが準備される。

高倉以仁王の道ネットワークでつながっているやまざくらまつり、カタクリまつりも県民手帳に紹介されている。



歳の神の設置場所は道路下の畑から今年道路わきの広場に移された



高倉以仁王の道ネットワーク



寒空に心も温かく
歳の神
同居はしていないが孫や甥の厄払い、慶事のおすそ分けなどでミカン三箱とお神酒がふるまわれた赤土の歳の神。「むかしはいっぱいいたのに」と里帰りしていた婦人は、歳の神の炭を塗りあつた若いころの思い出話に花を咲かせ、みんな火がなくなるまで、風雪のない星空のもと穏やかなひとときを過ごした。以前は歳の神つくりは十四日の前日でしたが、仕事の都合などで一月十四日直前の日曜日に行うようにしており、燃材のカヤは霜の降りる頃一戸あたり二束ずつ準備しておき、当日芯となる木を伐り出します。戸石では村中央の広場で赤土より一足早い時間に行われました。

(ストーリー性のある村づくりのために【No.20】下郷町史 後期 後期の遺跡としては湯野上・栗林・家ノ下・南倉沢A・板倉・萩原・芦原・安張・稲干場・木賊・五百地・大内の各遺跡があり、中期の場所に引き続き居住する例もあるが、南会津においては早期・前期と同様山間部への進出が確認できる。しかし中期の遺跡のように大規模な遺跡は見当たらない。後期初頭三十稲場式は栗林・左走・下平・萩原各遺跡跡から出土しており、前葉の称名寺式は南倉沢遺跡の資料がその好例である。堀ノ内I式は板倉・萩原・南倉沢・栗林・湯野上・稲干場・大内の各遺跡から出土している。中葉の加曾利B式は安張・芦原・家下・瀧平・稲干場・木賊の各遺跡から出土しており、それに続く貼瘤文のある新地式は安張・芦原・五百地・湯野上・南倉沢の各遺跡から出土している。後期の五百地・原両遺跡からは石錘が出土している。石錘の出土は南会津の後期以降の遺跡で確認されており、山間部で漁撈の普及があったことを裏付けている。南会津全体としては、後期初頭三十稲干場式は田島小塩遺跡や館岩・松戸ヶ原・上平各遺跡で出土している。伊南・堂平遺跡で一次・二次の発掘調査により、安行式土器に伴う箱式石棺墓や土杭墓群、土杭群、集石群、複式炉や居住の一部が検出されている。「下郷町史—第7巻通史編(発行・下郷町)」より出典(続く)」